2026年

朝倉摂の「素描」

―1950年代を中心に

実践女子大学香雪記念資料館
Kosetsu Memorial Museum Jissen Women's University

朝倉摂の素描―1950 年代を中心に

謝　辞

本展覧会の開催にあたり、貴重な作品をご寄贈くださいました個人の方々、ならびに研究調査にご協力を賜りました関係各位に厚く御礼を申し上げます。（敬称略、順不動）

富沢亜古　近藤和子　寺崎百合子　松野潤　GALERIE PARIS 森田彩子　神奈川県立近代美術館　西澤晴美

ごあいさつ

当館では朝倉摂（1922-2014）の絵画作品をご寄贈いただいたことを機に、2017 年に「朝倉摂〈リアルの自覚〉」展を開催しました。これは、小規模ながら 1940 年代から 60 年代までの絵画、素描、舞台美術のための下絵、絵本原画によって、朝倉の画家としての仕事を総合的に振り返る、没後初めての試みでした。

朝倉摂は 1940 年代から 60 年代頃まで新世代の日本画家として次々と新しい表現に挑戦しましたが、その後は主に舞台美術家として活躍し、自身では過去を振り返ることを好みませんでした。しかし 1986 年「戦後日本画の一断面－模索と葛藤－」（山口県立美術館）、1994 年「日本画の抽象　その日本的特質展」（O 美術館）、1996 年「瑠爽画社と一采社の画家たち－現代日本画家の青春群像」展（山種美術館）などによって、朝倉の画家時代の作品の先進性が改めて知られるようになりました。当館の展覧会の後には東京都現代美術館でも「百年の編み手たち－流動する日本の近現代美術－」（2019 年）の中で特集的な展示がおこなわれ、生誕 100 年となった 2022 年には本格的な回顧展が神奈川県立近代美術館、練馬区立美術館、福島県立美術館で開かれました。

画家朝倉摂の作品研究は少しずつ始まりましたが、まだ探求すべきことは多く残っています。当館の今回の展覧会は、2024 年にさらに寄贈された大量のスケッチブック、素描の中から、できるだけ多くを抽出して展示するものです。朝倉が自分は何のために描くのかを繰り返し問いながら、時代の中で生きるひとりひとりの人間に注いだまなざしを辿ることができるでしょう。

作品をご寄贈いただきました富沢亜古氏、作品整理に尽力されました近藤和子氏、アトリエ関係の方々にお礼を申し上げます。

2026 年 9 月
児島 薫

参考文献

朝倉摂、インタビュー・テープ起こし原稿、1957 年頃（未発表、実践女子大学香雪記念資料館蔵）
朝倉摂「絵画論を語る」1957 年 9 月 4 日、インタビュー・テープ起こし原稿（全文は未発表、実践女子大学香雪記念資料館蔵）
『アトリエ臨時増刊　新しいリアリズム』アトリエ出版社、1956 年 8 月
児島薫編「受贈記念　朝倉摂《リアルの自覚》」展パンフレット、実践女子大学香雪記念資料館、コギト、2017 年
神奈川県立近代美術館、練馬区立美術館、福島県立美術館編『朝倉摂の見つめた世界　絵画と舞台と絵本と』青幻舎、2022 年

展覧会

会　　場　実践女子大学香雪記念資料館　企画展示室 1・2
会　　期　2026 年 9 月 26 日～ 11 月 23 日
主　　催　実践女子大学香雪記念資料館
企　　画　児島 薫

解説パンフレット

「朝倉摂の素描―1950 年代を中心に」

発 行 日　2026 年 10 月 27 日（第二版）
編集・発行　実践女子大学香雪記念資料館
〒 150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49
https//www.jissen.ac.jp/kosetsu/

凡　例

- 本パンフレットは実践女子大学香雪記念資料館企画展「朝倉摂の素描―1950 年代を中心に」（2026 年 9 月 26 日～ 11 月 23 日）に際し、発行するものである。
- 作品の整理、リスト化は中嶋真理（実践女子大学香雪記念資料館臨時職員［学芸補助］が担当した。
- 文章は児島薫（実践女子大学香雪記念資料館 館長）が執筆した。
- 編集は児島 薫、三國博子（同学芸員）が行い、矢野綾香（同事務職員［学芸事務］）、中嶋真里・矢口まゆみ・山崎紗友里（同臨時職員［学芸補助］）が補助した。
- 図版は展示作品の一部を掲載した。キャプションは作品名、制作年、技法、材質、寸法、初出展等を記した。素描は制作年を記し、関連作品が確認できるものは、これも示した。
- 所蔵の記載のないものはすべて実践女子大学香雪記念資料館蔵。

第１章　朝倉家での成長と成功

朝倉摂の父、朝倉文夫（1883-1964）は文部省美術展覧会（文展）で受賞を重ね、東京美術学校教授を長く務めた彫刻家で、アカデミックな表現で知られた。自宅でも朝倉塾を主宰し、多くの塾生たちが日々制作していた。教育には独自の考えがあり、長女摂と次女響子（1925-2016）を学校に通わせず家庭教師をつけた。こうした環境のもと、２人とも早くから美術家となる。

摂は 1939 年に日本画家伊東深水に入門し日本画を学び始めるが、同じ年の鉛筆デッサンは、おそらく父のアトリエでモデルをしていた淡谷のり子を描いたもので、摂が父のアトリエでも人体スケッチの勉強をしていた様子をうかがわせる。戦前の文部省美術展覧会（新文展）には 1941、42、43 年と複数の人物を構成した作品を送って入選しており、戦後も日本美術展覧会（日展）に《沙上》（1946 年）、《バレーの踊子》（1947 年）、《黄衣》（1948 年）が連続入選する。《沙上》と《バレーの踊子》は後に朝倉が自身で切断してしまったために全体を見ることができないが、この構想のためのスケッチでは、人体を少ない描線で三次元的に捉えており、朝倉が彫刻的な対象把握の眼を持っていたことをうかがわせる[1]。

この時代には度々妹の響子をモデルにして描いており、《黄衣》（1948 年、神奈川県立近代美術館）と関連するスケッチも残されている。

朝倉は日展出品作の他にもう一点バレーを描いた絵画を構想しており、今回その全体の構想のスケッチも見つかった。しかし、《沙上》と《バレーの踊子》同様、この作品も後に朝倉が切断して木枠の裏に貼り込んでいる。なおモデルはアメリカ人バレエ・ダンサーのジェーン・バローだったことが判明しているが[2]、スケッチからは響子もモデルを代役した可能性をうかがえる。

1　朝倉文夫が三次元的に見ることを重視していたことについては以下で詳しく論じた。児島薫「初期の画業について」『実践女子大学分学区部紀要』63 集、2021 年 3 月、11-32 頁。

2　西澤晴美「占領期から一九五〇年代における朝倉摂の舞台美術について」『近代画説』32 号、2023 年、73-74 頁。



1939 年 3 月 18 日



1939 年頃

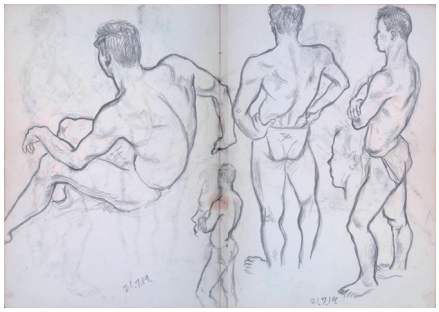


1948 年頃



資料《黄衣》1948 年
4 回日展　絵はがき

■《沙上》（1946 年、2 回日展）関連のモデル写生



1946 年 7 月 19 日



1946 年 8 月 31 日



資料《沙上》1946 年
2 回日展　絵はがき

■《バレーの踊子》（1947 年、3 回日展）関連のモデル写生、下絵



1947 年 7 月 6 日



1947 年 7 月 12 日



1947 年頃



資料《バレーの踊子》1947 年
3 回日展　絵はがき

第２章　画家としての自立

「私は絵を描いてきて、ある程度絵を描いたときに家を飛出した。ちょうど二十七である。その間戦争があった。戦争のときはほとんど絵は描けなかった。戦争が終って、自分にすごく疑問をもちだした。どういうところに疑問をもったかというと、絵を描くということ自体は、これは環境がさせている仕業じゃないか。もし私が魚屋か八百屋の娘に生れたときに、はたして私に絵を描く情熱があるか。これを自分にためしたくてしようがない。それで私が経済的に困ったらどうか。ほんとうに絵にしがみついて生きていくか。絵にしがみつけなかったら、私はそれでもいい。たとえば途中からなににになっても、なんで食っていってもそれでいいんだ。だから自分でもってやってみるよりしようがないということで、自分で自分の生活をやりはじめた。」[1]

後にこう振り返っているが、朝倉は 1949 年末から 1950 年初め頃に谷中の朝倉家を出て代々木本町に暮らし始めた。最初は「上原の伊藤さんの八畳にいた」と述べている[2]。西澤晴美によれば、これは舞踊家として知られる伊藤道郎の兄である伊藤鉄衛のことで、朝倉が 1948 年にアーニー・パイル劇場の舞台美術を手がけたことから、ここで舞台のプロデュースなどの仕事をしていた伊藤道郎、舞台美術家の伊藤熹朔兄弟を介して伊藤鉄衛の家に寄宿することになったと考えられている[3]。その後、1951 年には住宅金融公庫に応募して約 100 坪の敷地にアトリエを持つ自宅を建設した[4]。

画家としての朝倉は、1949 年から創造美術に参加する。1950 年春には日本橋の北荘画廊で初個展を開いた[5]。岩絵の具を用いながら「油絵具かと思うばかりに脂濃い絵具の使用を示した」[6]と評された画風を伝える展示作品は《自画像》を除きほとんどが所在不明だが、「この洋画風の新作は生気充満、野生の花のように情熱にみちて、時代の呼吸を感じさせている」[7]という制作の一端を示すものがスケッチに残されている。同年秋の 3 回創造美術展には、抽象的に人体を表した《群像》などを出品し、奨励賞を受賞した。今回、《群像》の構図を構想しているスケッチブックの中に新居の間取りを考えている様子や舞台美術に関連する書き込みが見つかった。

アトリエでは週末デッサン教室を開き、その日の参加者が交替でモデルになって 10 分間のクロッキーを試みた[8]。そうしたクロッキーも残されている。この頃には雑紙の取材も増え、画家として注目を集めるようになった。

1　朝倉摂、インタビュー・テープ起こし原稿。
2　朝倉摂「絵画論を語る」。
3　西澤晴美「占領期から一九五〇年代における朝倉摂の舞台美術について」『近代画説』32 号、2023 年、76-77 頁。
4　「訪問･二人の作家（二）朝倉摂」『美術手帖』1953 年 10 月、59-61 頁。
5　北荘画廊については、大谷省吾「北荘画廊をめぐって－戦前と戦後をむすぶ場所」『近代画説』23 号、2014 年、44-70 頁に詳しい。
6　田近憲三「朝倉摂個展評」『三彩』43 号 1950 年 6 月号、31-32 頁。
7　同上。
8　「訪問・二人の作家（二）朝倉摂」前掲誌。



自画像
1947-50 年頃　顔料、紙　40.8 × 31.6cm
「朝倉摂作品展」（北荘画廊、1950 年）
GALERIE PARIS（特別出品）



参考図　1950 年頃
《赤いフード》（1950 年頃、神奈川県立近代美術館）関連の素描

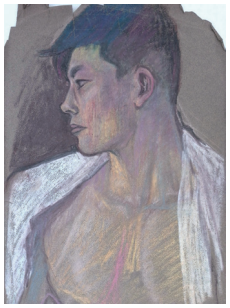
■「朝倉摂作品展」（北荘画廊、1950 年）出品作関連の素描



1949 年 12 月 16 日



1950 年 2 月 22 日



1950 年頃
《レスラー D 君（色彩素描）》
関連とみられる



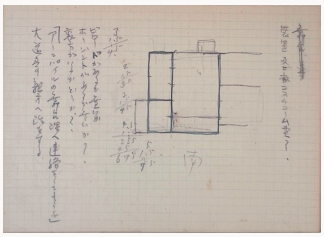
1950 年頃

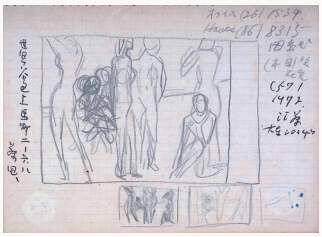
［コラム］ **舞台美術について**

朝倉摂といえば舞台美術家として知られてきた。舞台美術を最初に手がけたのは1948年のアーニー・パイル劇場で上演されたドナルド・リチーによる「パーティー」であった。今回、1950年9月に発表した《群像》のための構図スケッチが描かれたスケッチブック（整理番号688）の中に、舞台に関わるメモ書きが見つかった。

装置及ビ衣コスチューム費？

ビロードがあるか無いか
ホリゾントがあるか無いか？
裏方がいるかどうか？
「アーニパイルの舞台課へ連絡をしてもらふ」
大道具の親方へ話をする


舞台に関わるメモ書き


《群像》のための構図

このスケッチブックには1950年1月31日『婦人公論』2月号に寄稿したことへの礼状が挿まれていることからも、この年の何らかの舞台美術を構想したメモと考えられる。

第3章　社会へのまなざし―新しいリアリズムの探求

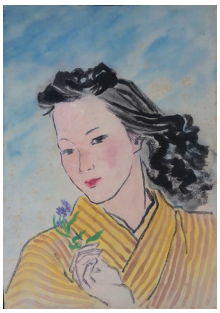
挿絵や雑誌の表紙絵を描くことで生計を立てようと考えた朝倉は、当初は出版社を回って仕事をもらった。また佐藤忠良とともに桑沢デザイン研究所でスタイル画を教えた。取材に同行してお菓子工場や薬品工場などで働く人々を描く仕事をしたり、工場の人たちの文化活動である「サークル」を訪れて話を聞いたりした。1954年には『朝日新聞』にルポルタージュの絵と文を寄せるコラム「東京昨今」に記名で寄稿した。

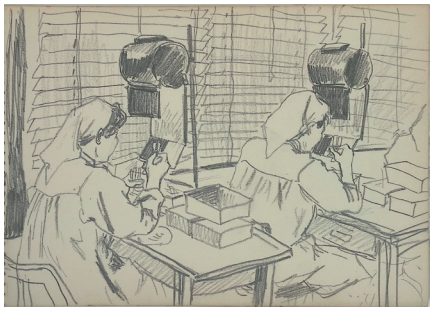
朝倉は《働く人》（1952年、山口県立美術館）が松園賞を受賞した際の取材に「日本画の新しいレアリズム確立、などというおおそれたことはもち論いえませんが、私と現実の対話をこの作品を契機に」進展させたいと述べている[1]。

1950年代半ばには、森芳雄、佐藤忠良、西常雄、中谷泰、竹谷富士雄、鳥居敏文、吉井忠とで常磐炭田、京浜工業地帯などに写生旅行を繰り返す。1953年と55年には画家渡辺学の案内で銚子の漁港を訪ねている。彼らは具象表現による「新しいリアリズム」をめざし、昼は思い思いにスケッチし、夜は講評し議論しあった。朝倉は現実と向き合い写生しながらも、絵画としては「現実と違った内部の統一を作り出さなければならない」[2]として具象による新しい表現を探っていく。

その集大成として位置づけるべき大作が、《求める人々》（1956年、20回新制作展）、《日本1958》（1958年、3回現代日本美術展、福岡市美術館）、《日本1958-2》（1958年、22回新制作展、山口県立美術館）、《黒い太陽と囚われ人》（1959年、5回日本国際美術展）であり、急速に工業化していく日本社会のなかで置き去りにされていく人々の閉塞感を表現した。現在は《求める人々》と《黒い太陽と囚われ人》は所在不明だが、これらのためのデッサンがスケッチブックに残されている。これらを見ると朝倉はこの頃にはほとんど迷い無く構図を決定していたようである。

1　「認められた探究心　第3回松園賞　朝倉摂女史」『毎日新聞』夕刊1951年2月6日2面。
2　朝倉摂、インタビュー・テープ起こし原稿。


1950年頃
雑誌『新女性』の表紙のための試作か


1955年頃　動物実験をする研究所のスケッチ


1950年代　巣鴨刑務所のスケッチ

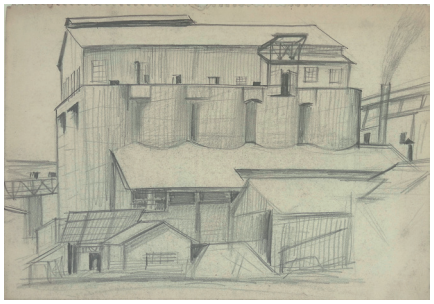
■工場の素描



1955 年頃



『週刊朝日』60 巻 31 号
1955 年 7 月 31 日
表紙：朝倉摂



1956 年頃



1960 年代

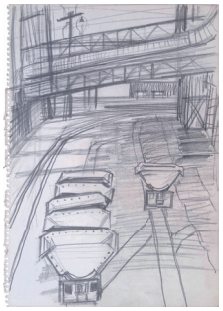
■写生旅行



1955 年頃



1955 年頃

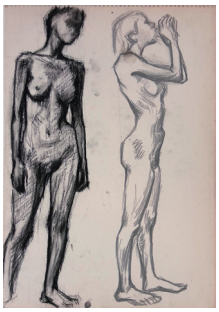


1956 年頃

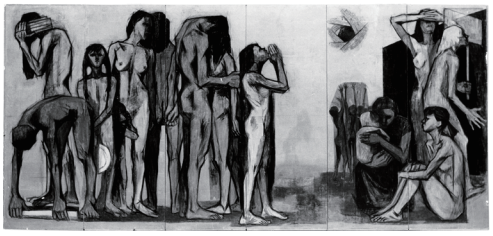
■展覧会出品作関連の素描



1955 年頃
《おんな》（1955 年、平和美術展）関連の素描



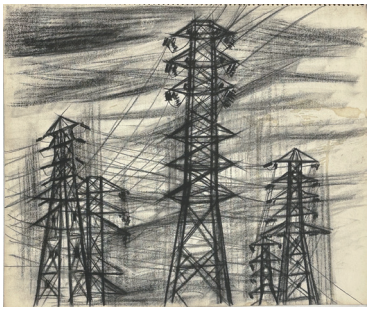
1956 年頃
《求める人々》（1956 年、20 回新制作展）関連の素描



《求める人々》1956 年　20 回新制作展　作品写真



1958 年頃
《日本 1958》（1958 年、3 回現代日本美術展、福岡市美術館）関連の素描



1958 年頃
《日本 1958》（1958 年、3 回現代日本美術展、福岡市美術館）関連の素描



参考図　《日本 1958》1958 年　3 回現代日本美術展
福岡市美術館
（『朝倉摂の見つめた世界　絵画と絵本と舞台と』青幻舎、2022 年）



1957 年頃
《閉ざされた部屋》（1957 年、朝倉摂・佐藤忠良・中谷泰三人展）関連の素描



部屋
1957 年　顔料、キャンバス　89.5 × 149.9cm
21 回新制作展



題名不詳（倒立する人物）
1957 年頃　顔料、キャンバス
53.0 × 41.0cm



1959 年頃
《黒い太陽と囚われ人》（1959 年、5 回日本国際美術展）の構図下図



資料
《黒い太陽と囚われ人》1959 年　5 回日本国際美術展　絵はがき

［コラム］《部屋》について

朝倉は父の方針で女学校には通わず、当時の型にはまった女子教育は受けなかった。それでも「私が子供のときにいちばん感じたことは、女に生まれたことがいちばんくやしかった。毎日のように、女になぜ生まれたんだというふうなことを親父に聞いた」[1]と回想し、当時の社会の男女のジェンダー格差を自覚していたとみられる。別のインタビューでも「私が絵を描いたということは、女に生まれたということがつまらないということのコンプレックスのうえに立って、絵を描きはじめてしまったということが多分にある。そういうことにこだわらざるをえなかった社会状態だったということが言える」と述べている[2]。

朝倉塾で多くの男性たちが学んでいる環境に親しんでおり、《沙上》のための人物デッサンなどからは伸び伸びと男性モデルを描いていた様子を想像できる。写生旅行でも年齢の差が有りながらも対等な仲間として研究をおこなっていた。しかし次第に男性評論家たちが展覧会評を雑紙に書く時代となる中で、朝倉は「若い女性の日本画家」という括りの中に入れられていったようにみえる。

「女の側から女というものを見つめたいというのが私の念願」[3]であるという朝倉の言葉は、横たわり顔を覆い煩悶するような女性の裸体を《おんな》（1955 年、平和美術展）とその類作を繰り返し描いている時期と重なるとみられる。自分自身では女性を意識せずに活動しているつもりでも「女」として括られる中で、敢えて「おんな」と題して悩む姿を描くという発想は、唐突ながら上村松園が敢えて「女の嫉妬」に取り組んで《焔》を描いたことを想起させる[4]。しかし朝倉はそうしたジェンダーギャップに対する疑問を、男女という枠組だけに留めず、社会の強者と弱者という、より大きな問題への問いかけへと広げていく。《部屋》（1957 年）ではおそらく空回りする車輪と倒立する少年の姿がそこから出ることができない閉塞感を表し、同じ年に描かれた《閉ざされた部屋》にも同じような女性が腕を組む姿で狐の面を持って描かれる。その一方で、倒立する少年の姿は《肯定的にとらえられた生》（1957 年）では屋外の労働者と共に描かれる。今回収蔵になった小品では猫も逆さまになっており、世界を逆転させようとするようなユーモラスな表現となっている。そして《日本 1958》（福岡市美術館）の中では車輪は横たわる男性を乗せるものとなっており、男性は倒立はしないものの、やはり頭を下に逆さまに描かれ、あたかも殉教者のようである。画面中央には狐の面をかぶる女性が正面を向き堂々と描かれる。面をつける女性は朝倉の言葉によれば、あるいは「真実のある人間」かもしれず[5]、力強く社会の不平等を訴える。

所在不明の《黒い太陽と囚われ人》は国立近代美術館（現、東京国立近代美術館）で 1960 年に開かれた「日本画の新世代」展に《閉ざされた部屋》、《黒人歌手ポール・ロブソン》とともに出品されており、出品目録の題名は、《日本 1959（黒い太陽と囚われ人）》となっている。スケッチブックに描かれたこの作品の構図のスケッチは小さいものだが、ほとんど完成作と同じである。なお《部屋》で朝倉はキャンバス地に新しい技法を試みているため、赤い絵具が細かく剥離してきており、今後これを押さえる処置が可能かどうかは現時点では不明である。

1　朝倉摂「絵画論を語る」。
2　朝倉摂、インタビュー・テープ起こし原稿。
3　同上。
4　児島薫「上村松園《焔》の制作意図とその背景について」『紀要』第 62 集、実践女子大学文学部、2020 年、1-15 頁。
5　本作については増渕鏡子解説（『朝倉摂の見つめた世界　絵画と舞台と絵本と』88 頁）を参照。

朝倉摂 年譜

本年譜は児島薫「朝倉摂年譜」(『受贈記念　朝倉 摂 リアルの自覚』展パンフレット、実践女子大学香雪記念資料館、2017 年）に加筆･修正したものである。

1922 | 7 月 16 日、東京市下谷区谷中に生まれる。父は彫刻家朝倉文夫、妹は彫刻家朝倉響子。

1939 | 日本画家伊東深水に入門。

1940 | 1 月、深水主宰の 1 回青衿会展《麗日》。

1941 | 1 月、2 回青衿会展《うゐかへ》。5 月、4 回新美術人協会展《九官鳥》。10 月、4 回文部省美術展覧会（新文展）に《小憩》初入選。

1942 | 2 月、3 回青衿会展《街頭に観る》後援会賞受賞。5 月、5 回新美術人協会展《更紗の室》(更紗の部屋)。10 月、5 回新文展《晴晨》。

1943 | 4 月、4 回青衿会展《陽》。5 月、5 回閃人社展《小憩》(素描)。10 月、6 回新文展《歓び》。

1946 | 10 月、2 回日本美術展覧会（日展）《沙上》。

1947 | 10 月、3 回日展《バレーの踊子》。

1948 | 10 月、4 回日展《黄衣》。この年、一采社に参加、またアーニー・パイル劇場「パーティー」ドナルド・リチー作の舞台美術を手がける。

1949 | 3 月､8 回一采社展《女》《そだ》。5 月､9 回青衿会展《エチュード A》《エチュード B》。9 月、2 回創造美術展《ノアール》《反映》。

1950 | 2 月、2 回日本アンデパンダン展《坂》。3 月、選抜秀作美術展《日まわり》。4 月､初個展「朝倉摂作品展」(北荘画廊)､9 回一采社展に《向日葵》。5 月、2 回春季創造展《黒い猫》《猫（エチュード)》。9 月､3 回創造美術展《群像》《裸婦 A》《裸婦 B》《裸婦 C》に奨励賞。この年、ベルギー大使館主催 2 回サロン・ド・プランタンで《自画像》が日本画一等賞受賞。

1951 | 4 月、10 回一采社展《作品 H》《赤いフード》《静物》。5 月、3 回創造美術春季展へ準会員として《男》出品。9 月、創造美術と新制作派協会が合同し新制作協会となる、15 回新制作展《裸婦 A》《裸婦 B》《裸婦 C》、新制作協会日本画部会員に推される。

1952 | 4 月、11 回一采社展《少女》、新制作春季展《街の子》。9 月、16 回新制作展《働らく人》。10 月､「朝倉摂･村尾絢子二人展」(日本橋 丸善画廊)。12 月､「日本近代美術展 近代絵画の回顧と展望」(国立近代美術館)《裸婦 B》(1950 年)。

1953 | 2 月、《働らく人》(1952 年）が 3 回上村松園賞受賞、記念展。4 月、12 回一采社展《休む人》､新制作春季展《日雇の母》。5 月､2 回日本国際美術展《働らく人（清掃夫)》。9 月、17 回新制作展に《夫婦》《寮》。

1954 | 1 月、2 回平和美術展《担ぎ屋の女》。4 月、13 回一采社展《おんな》、新制作東京日本画展《をんな》、桑沢デザイン研究所が設立され、教員となる。5 月、1 回現代日本美術展《母》。9 月、18 回新制作展《背負う人々》《群れ》。

1955 | 1 月､6 回選抜秀作美術展《おんな》。3 月､7 回日本アンデパンダン展《女》､「松方コレクション 国立美術館建設協賛展」(国立近代美術館)《おんな》。4 月、14 回一采社展《浜の母子（未完)》。5 月､「朝倉摂・佐藤忠良・中谷泰三人展」（サエグサ画廊、翌年から 58 年まで村松画廊で毎年開催)、3 回日本国際美術展《うたごえ》。6 月､新制作協会会員展《買物籠》。8 月､平和美術展《おんな》。9 月、19 回新制作展《おんな A》《おんな B》《担ぐ人々》。

1956 | 4 月､15 回一采社展《夜》。5 月､2 回現代日本美術展《立話》《おんな》。9 月、20 回新制作展《求める人々》。この年、アジア連帯委員会文化使節団に加わり中国、ソ連を訪れる。常磐炭田にスケッチ旅行。

1957 | 1 月､「朝倉摂デッサン展」(サエグサ画廊)。3 月､「堀文子・朝倉摂・秋野不矩・広田多津四人展」(三原橋画廊)。5 月、4 回日本国際美術展《肯定的にとらえられた生》。6 月､「女流十五人展」(新宿 ブランシェ)。9 月、21 回新制作展《部屋》。この年、ぶどうの会「暗い火花」(木下順二作、岡倉士郎演出）の舞台美術を制作。

1958 | 1 月、映画プロデューサーの富沢幸男と結婚。5 月、3 回現代日本美術展《日本 1958》。9 月､22 回新制作展《日本 1958–2》。10 月､「朝倉摂･小畠鼎子･横山操素描三人展」(みつぎ画廊)。12 月 4 日、一人娘の亜古誕生。

1959 | 5 月、5 回日本国際美術展《日本 1959 黒い太陽と囚れ人 》。9 月、23 回新制作展《黒人歌手ポール・ロブソン》。シベリア鉄道で、ウィーン世界青年学生平和友好祭に美術代表として参加、銀賞受賞、その後パリなどを回る。

1960 | 2 月､「日本画の新世代」展(国立近代美術館)《閉ざされた部屋》《挫した男》《黒人歌手ポール・ロブソン》《日本 1959（黒い太陽と囚われ人)》。5 月、4 回現代日本美術展《仲間》。6 月､日本現代画展覧会《背負う人》(1955 年)。9 月、24 回新制作展《内部への挑戦》。

1961 | 5 月､6 回日本国際美術展《告発 '61 年》。7 月､「ドイツ大サーカス公演」（後楽園アイスパレス）舞台装置担当。

1962 | 5 月、5 回現代日本美術展《うり子姫とあまんじゃく》。9 月、26 回新制作展《瓜子姫とあまんじゃく》。

1963 | 5 月、7 回日本国際美術展《1963》。6 月、新制作日本画五人展（スルガ台画廊、65 年 3 回まで参加)。9 月、27 回新制作展《終りは始め》。針生一郎らの主宰する「日本画研究会」が発足、これに参加。

1964 | 5 月、6 回現代日本美術展《神話の廃虚（1)》《神話の廃虚（2)》、28 回新制作展《幸せの外の不幸せ》。

1965 | 1 月、国立近代美術館「戦中世代の画家展」《幸せの外の不幸せ》、この時点で日本舞台美術家協会会員、桑沢デザイン研究所教授。5 月、8 回日本国際美術展《何かが始まった》。

1966 | 4 月､学校法人桑沢学園東京造形大学設立（71 年頃まで教授)。6 月､「〈針生一郎の選んだ〉これが日本画だ」展(日本画廊)。8 月､「1 回戦争展」(日本画廊)。9 月､30 回新制作展《茶の間の SANCTUARY》《双六形式による「戦争ゲーム」》。

1967 | 5 月､9 回日本国際美術展《出口のない空間》､新制作日本画春季展《花》。7 月､「朝倉摂・渡辺学作品展」(銀座松屋)。9 月、31 回新制作展《出口のない空間》。

1968 | 1 月、4 回八駿会展（スルガ台画廊）(73 年 8 回まで参加)。この年、講談社「さしえ賞」受賞。

1969 | 12 月､「朝倉摂イラストレーション 69」展（ギャラリーオカベ)。

1970 | 1 ～ 4 月、ロックフェラー財団の招待で渡米、舞台美術を研究。この年、新制作協会を退会、講談社「絵本賞」受賞。

1971 | 2 月､「戦後日本美術の展開 具象表現の変貌」展（東京国立近代美術館）《黒人歌手ポール・ロブソン》。

1972 | 5 月、3 回講談社出版文化賞絵本部門受賞『スイッチョねこ』。

1976 | 4 月､「朝倉摂作品展」(ギャルリーワタリ)。9 月､立動舎「人形姉妹」(富岡多恵子作）を演出。

1979 | 11 月､「戦後日本画の語る人間像」展（京都市美術館）に 4 点展示。

1981 | 7 月､「朝倉摂絵本原画展」(和光ホール)。

1986 | 4 月､「セツノグラフィ･朝倉摂ステージワーク '86」展(渋谷パルコ･スペース・パート 3)。

1987 | 紫綬褒章受章。

1989 | 1 月、88 年度朝日賞受賞。3 月、日本アカデミー賞優秀美術賞受賞。

1990 | 7 月､「朝倉摂展―ねこと居る―」(和光ホール)。10 月､「戦後日本画の精華展」(青梅市立美術館)《働らく人》。

1991 | 8 月､「宮沢賢治・童話の世界展」(茨城県近代美術館)『注文の多い料理店』原画。10 月､「20 世紀 日本の絵画展」(ふくやま美術館)《日本 1958–2》。

1994 | 2 月､「日本画の抽象 その日本的特質展」(O 美術館)《出口のない空間》。

1996 | 「瑠爽画社と一采社の画家たち―現代日本画家の青春群像」展（山種美術館）に 3 点展示。

2000 | 「松園と松園賞受賞の画家たち展」(松伯美術館、天竜市立秋野不矩美術館）に 7 点展示。

2006 | 文化功労者に認定。

2010 | 9 月､「朝倉摂展 アバンギャルド少女」(BankART Studio NYK)。

2014 | 2 月、読売演劇大賞芸術栄誉賞受賞。3 月 27 日、91 歳で逝去。

2015 | 7 月､「朝倉摂 Setsu Asakura, the 1950s」展（GALERIE PARIS)。

2016 | 9 月､「朝倉文夫・摂・響子三人展」(台東区立朝倉彫塑館)。

2017 | 11 月､「受贈記念　朝倉 摂 「リアルの自覚」」展（実践女子大学香雪記念資料館)。

2019 | 3 月～ 6 月､「百年の編み手たち―流動する日本の近現代美術―」の中で、特集展示が行われる。

2022 | 4 月～ 10 月､「生誕 100 年　朝倉摂」展（神奈川県立近代美術館、練馬区立美術館、福島県立美術館)。